遊戯王＋俺が幻想入

ALFRED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王＋俺が幻想入

【Ｎコード】
Ｎ０１８０Ｇ

【作者名】
ＡＬＦＲＥＤ

【あらすじ】
始まりはＭｉｘｉで日記を書いていて、普通じゃつまらないと思ったのが発端。以来、他の連載小説放ったらかしで嵌り続けた結果がこれだよ！？幻想郷入りした俺が咲夜さんに惚れたお話、かもしれない……

幻想郷で遊戯王（前書き）

この日記は完全な趣味と趣味と趣味で出来ています。カオスなのは当たり前です。自分主義、カードのルールは一応遵守してますが、アニメ補正（ルールミス）があったら、異議は認める。指摘してくれたら聞き入れる。運命（物語）補修はレミリアに頼んでください。では、遊戯王幻想郷いり、ご堪能ください。

幻想郷で遊戯王

【新春紅魔祭】

博麗霊夢
「どうもこんばんは、博麗霊夢です」

霧雨魔理沙
「霧雨魔理沙ですッ！
……って、何でこの寒空の紅魔館に来なきゃなんねえんだよ」

Λ　Λ
（＝・ω・）＜乗り良いな、東方主人公ズ

霊夢「こんばんは、猫さん。ＡＬＦはどうなの？」

Λ　Λ
（＝・ω・）＜風邪で暇ぶっこいてたよ。年明けバイトは早く行き過ぎて、独りでストーブ当たって寝ぼける程度に元気

魔理沙「ふぅん。んじゃ――調子は万全っぽいな」

初音ミク＜始まるね――

霊夢「新年から面倒くさいわね」

【紅魔館屋上――屋根の上】

レミリア・スカーレット
「さぁ、はっじめっましょ～始めましょう♪」
ＡＬＦ「……質問、何で屋根の上で、しかもクソ寒い風吹いてるの」
チルノ「雪も降らせたら臨場感抜群ッ！」
ＡＬＦ「バカは帰れ！」
チルノ「むぅ！　パーフェクトブリザード！！」
美鈴「落ち着け、バカチルノ」
チルノ「バカじゃないモン、バカじゃないモン！」
美鈴、チルノ連れて退場――
ＡＬＦ「……本当、雪振ったら炬燵で丸くなるぞ」
ＰＡＤ長「なったら？」
Ｃａｒｄ長「……さっさと終わらせません？」
レミリア「ほらほら、あんたたちのために特性のデュエルディスク作ってあげたんだから」
初音ミク＜ここから小説風味に進みます。皆様、ご了承くださいませ――

幻想郷の夜は冷たい。
そんな冷たい夜空に抱かれる、巨大な屋敷の屋上に陣取るのは、
我らが知るぞ知る、神社の巫女――
「うぅ～さぶい……」
ではなく、
「でも、なんで屋根上の月の見える場所で喧嘩しようってんだ？」
……でもその前に、我らが巫女と魔法使いがでしゃばるようです。
紅魔館の外だというのに、掘り炬燵を敷いて屋根上を見れる程度の位地の庭を陣取っている、博麗神社のご一行。
掘り炬燵の主、浅黒い肌と白銀の髪を持つ妙齢の女性が茶を注ぐ。
意外に様になっている。
「遊戯王でもそう言うネタがあったのよ。頂上決勝のときは、高いところでやるとか」
「そ～そ～……あと、気球の上でもやってたよね？」
うなずくのは……ロリだった。
魔法使いのような風体で、魔法使いなのだが、魔理沙のような黒魔術師とは魔逆の、カラフルで現実世界での魔法少女と言うキャラクターに近い。
「ようは、あれよ。博麗霊夢なのよ」
「ちょっと、それどういう意味よ」
「高いところが好き」
「……まぁ、地底よりは高いほうが好きだけど」

――屋根上

……ひっくしゅん。
意外に可愛いクシャミが聞こえた。

「大丈夫？　咲夜さん」
「アナタがこんな提案したからでしょう」
「……さっさと終わらせましょう」
（いや、なんでこんなときまでメイド服……）
対峙する白いメイド姿の妙齢の娘が二人、そして黒を基調とした普段着姿の青年。

「コントラストとしては悪くないわね」
その間に割り立つ、尼僧のような寝巻きのような、法衣をまとった小さな娘……
パチュリー・ノーレッジ。今回はデュエルのジャッジ程度の登場です。
「じゃあ、お嬢様……」
「えぇ、いいわよ」
さらにその後ろには翼……漆黒の悪魔の持つ翼を広げた、彼女たちの主――レミリア・スカーレットお嬢様が控えている。
今回は主催者程度の登場でございます。

〜〜庭〜〜

漆黒の猫が過ぎる。
「いよぅ、諸君……最近、っつかメタボな黒猫だ。よろしくぅ」
炬燵の前を過ぎり、
紅魔館の門を過ぎり――

「今さらだが状況解説だ。
日記で咲夜を嫁にしてぇって叫んだ、バカアルフにレミリアが悪乗りしやがったんだ。
で、なんだか日記で遊戯王を幻想郷入りさせるとか、そんなネタ用意してたのに、

一向に披露してねぇから、こういう展開になった」
「猫さん、お喋りね」
「うぃ、美鈴（メイリン）」
「……」
「いや、名前を正しく呼ばれた程度で喜ぶな！」
別に美鈴は表情が変わったわけではないのだが……人の顔を読むのは黒猫も得意のようである。

「今回は、２ｏｎ１のバトルロイヤル式デスマッチ。
ＡＬＦの召喚した十六夜咲夜と、紅魔館在住のメイド長と、この世界じゃカード咲夜とリアル咲夜さんの二人が存在するってわけ」
「ややこしいですね」
「でだ、何か罪袋かぶった連中が、ＡＬＦ市ねってオーラを出しまくってるんで、通常でもつまらんし、カード咲夜も自分のオリジナルが穢されるのすんげぇ嫌そうだったんで、バトルロイヤルになったと」
「……ハンデあり過ぎじゃないですか？」
「うん、さらにハンデ。遊戯王オリジナルカード【十六夜咲夜】の使用に、スペルカード【プライベート・スクウェア】の使用が二人には与えられてる。本人だしね」
「美鈴、圧勝じゃないですか」
「でもね、ＡＬＦはデュエル暦　１０年なんだよね」
美鈴さん、硬直――猫、器用に前足をやれやれの仕草。

「小学校時代からデュエリスト」
「いまや２３のクソ爺ですからね」
「……爺？」
「咲夜さんに手を奴は全員クソジジイです」
壮絶な微笑みを浮かべる紅美鈴。猫さんたじたじ――

「しかも、現実世界では教祖とか言うデュエリストにボコボコにされてるそうですね」
「うん」
「さらにはミカちゃんと言うデュエリストには、１ターンキルを何度も喰らってるし」
「うふふふ」
「この間はカトゥーと言うデュエリストにもフルミックに」
「……これ、無謀じゃね？」

【屋上】

「無謀で悪かったな」
ふて腐れるＡＬＦ……寒いのか、蟹股でガタガタ震えている。

「あはは、ダッサ」
「うっさい、お嬢様――さっさと終わらせて、餅食おうぜ」

するとふわふわと寝巻き娘……じゃなくって、パチュリーが真ん中に立って。

「じゃあ、始めるわよ。形式はバトルロワイヤル、ライフは各自８０００」
「ういさ～」
「はい」「では――」

無数の蝙蝠たちが集い、二人の咲夜の腕に集う。
蠢く蝙蝠たちは一塊の紅色となり、咲夜の腕に纏われる。

「お、カックイイ」

「ふふん、パチュリーお手製の紅魔専用、デュエルディスクよ」
二枚の蝙蝠の羽が折り重なるように並び、魔法罠・モンスターゾーンに区別され、
ディスク中央の円盤には猫のような蝙蝠のような顔を象った……怖いのか可愛いのかどっちつかずな動物が描かれており、
ライフポイントを表示するデジタルが瞳の中で彩られている。

「……で、アンタのディスクは？」
「ん？　野良デュエリストの俺にそんなものはない。せいぜいカード目当てで入手した、アカデミー版デュエルディスクとオシリススレッド版がある程度」
「それ使いなさいよ」
「やだ、カードが痛む――俺は」

そういうと、ＡＬＦ――胸ポケットから一枚の、符を翳す――

「幻想郷に習う――」

決符【幻想決闘演技】
『ファンタズム・デュエル・アクセラレーション』

「いつの間にそんなスペルカードを……」
「毎日賽銭してたら、霊夢がくれた」

そう言うとＡＬＦ……宙に浮く。
……！？

「ちょっとだけ空を飛べる程度のスペカ。んで、」
カードを五枚、ドロー＆――キャスト（空に放る）。

五枚のカードは巨大化し、ＡＬＦの周囲に展開、周りを規則正しく回り――手札となる。

「カードを実体化させる程度のスペカ。んじゃ、始めましょう。早く終わらせて雑煮食おうぜ～」

「それはいい案です。では、死んでください」

「はぁい、では嫁に貰う」

～～～～

ミカン剥き剥き――ぽりぽり。

クリスマスのあまりケーキ、もぐもぐ……

「あれはデュエル王国で、社長が作った試作版デュエルディスクのリスペクトですね」

とは、カラフルな魔術師、カードエクスクルーダー。

「派手好きね。何か寒くてやる気なくなってるけど」

ミカン剥き剥き、ダークヴァルキュリア＋炬燵。

「いつものことよね」

腋、ちらちらちらりずむ～

「しかし、全世界の咲夜さんファンを敵に回しかねないんじゃないですかね？」

「……あんた、いたの？」

この扱いは遊戯王のどこかで見たことがある。ＧＸだ。

「わ、私はここにいました！」

初音ミク……ツインテールのクソ長い娘である、以上。

「はぅ！？　私の解説が少ない！」
いいじゃん、主役じゃないんだし――
「誰と喋ってるんだ？　あの娘」
キノコを器用に剥いてる魔理沙。
「いいのよ、あいつ電波ロイドなんだし」
「ヴォーカロイド！　な、なんで私なじられてるのぉぉぉ～？」

～～～～

【1ターン　ALF】
【手札5】
【場□□□□□
□□□□□】

「んじゃ、ドロー」
カードを一枚ドロー&スルー。新たな巨壁がALFの前に並べられ――

「モンスターをリバースセット、魔法罠一枚セットで、ターンエンドっと」

【1ターン　ALF】
【手札4】
【場□□■□□
□□■□□】

【2ターン　カード咲夜】
【手札5】

【場□□□□□
□□□□□】

「では、私のターンで。引きます」
白い指先が丁寧にカードを爪弾き、

「ちょいまてゐッッッ！」
なんだよ？
「こら、筆記者、手前ぇ――何俺のフェイズは台詞だけでスルーしてんだよ？」
バカ言え、読者にむさい、ださい、黒い、２３の成人男子の描写なんかしたって、誰も惹かれないだろう？
「いや、マイミクの女子とか！」
期待してみるか？
「……ＯＴＬ」

「……マスター、どっかのＶＯＫＥＬＯＩＤのように電波と話さないでください」
「いつの間にかミクがなじられ役になってるのは何故？　さりげにミク苛めてるし」
やれやれと嘆息するカード咲夜さん、反対に本家咲夜さんは楽しそうにコロコロ笑っている。

「では、カードを４枚、魔法罠を配置し、フィールド【王家の谷ネクロバレー】を発動いたします」

刹那――
「小説で刹那とか無駄に難しい漢字使って、臨場感をあげるのって厨二っぽいよな」
うるせぇ！　刹那ってのは一瞬とか、瞬く間にとかそんな意味だよ

！

宵闇に支配されていた世界に、夕日が差し込み――紅魔館は巨大な崖の回り囲まれる。

【王家の谷　ネクロバレー】
お互いの墓地のカードに効果が及ぶカードの魔法、罠、効果モンスターの効果を無効にし、除外もできなくする。
墓守と名の付くカードの攻守を５００あげる。

「……って、電波と阿呆やってらんねぇな。うわぁ、ガチデッキで来たな」
「貴方が大会優勝デッキを参考につくられた。ギオン墓守のデッキです。シンクロ用に多少いじってありますが」
「ついでに言うなら、初めて【十六夜　咲夜】がシンクロに成功し、効果も発動できた最初のデッキでもある、と」

カード咲夜の足元には、伏せられた四枚のカードが現れ、中央に集まる黒い円状の絵柄が、ほの暗い闇へ誘うような気がする。
巨大化するカード、そして現実化する世界――

この臨場感を小説程度で表せる程度の技術は俺には無い！
「諦めるのかよ！？」

「バトルロイヤル形式上、１ターン目は攻撃できませんので、モンスターを裏側セットいたし、ターンエンドです」

【手札０】【ネクロバレー】
【場□■■■■
□□■□□】

〜〜〜〜

炬燵なヴァルキュリア曰く「……すんごい、メタモルフラグね」
カラフルロリ、曰く「手札消費と言うか、パーミッション――カウンター罠満載のデッキですからね、墓守」
腋巫女曰く、「わかりやすく解説もらえる？」

「メタモルポットって言うリバース、伏せ状態から表になったときに発動するモンスターがあってね」
「発動すると、手札を全て墓地へ捨てて、デッキからカードを五枚引けるの。
この場合、カードをフィールドにたくさんだした、カード咲夜のフィールドアドヴァンテージ、用は優勢度がぐんと高くなる、ってこと」
「デュエルモンスターは基本、手札1枚でどれだけ相手のカードを倒せるかで優劣が決まるのが基本。
ただ強いカードほど制約が強くなったり、手札から使えなくなったりするの」
「逆に一枚の破壊できないカードでも、フィールドを操作したり、そのターンの優劣を動かすだけで相手の強力カードを倒せたり」
「ごめん、黒い娘、彩りロリ、全然わかんない」

【3ターン　十六夜　咲夜】
【手札5枚】
【場□□□□□
　□□□□□】

「では、引きます……あら？」
本家、咲夜――ころっと笑顔が崩れ――

「……この勝負、すぐ終わりそうです」
穏やかな、そしてどこか慰めのような笑みを零し、二枚のカードを魔法罠ゾーンに配置し――
二体の墓穴がフィールドに現れる！
「【おろかな埋葬】を二枚、発動します。デッキから任意のカードを墓地へ送るカードです」
二つの墓穴に飲み込まれる、二枚のカードから、巨大な葉の上に座る、目つきの悪い花の魔物が、墓穴に吸い込まれる。
「墓地に送るのは、【サクリファイス・ロータス】。エンドフェイズ時、魔法、罠が無い場合、墓地から特殊召喚できるカードです」
「【ネクロバレー】は墓地に効果が及ぶ効果を無効にする、『墓地に存在するカード効果』は無効化できません」
フィールド発動者の、カード咲夜が丁寧に解説し、本家咲夜さんは小さくうなずき、
「さらに、永続魔法【神の居城ヴァルハラ】――毎ターン1度のみ、フィールド上にモンスターが居ない場合、手札から天使モンスターを特殊召喚できます。」
「……奴かよ、おいで――」

～～～～

黒猫――屋根上にのぼって、間近で静観。
「ありゃ、詰んだな」
「つんだ？」
とは、中国――ではなくって、紅美鈴。ホン・メイリン。

「【アルカナフォース　ＸＸＩ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ】。通称、ＤＩＯ。
相手のターンをスキップする、まさしく時を止める程度の能力を持ったカード。
もっとも、もう一つ効果があって、その効果の選択がコイントス（コインで表裏を当てる）で決まるという複雑なモンスター」
「へぇ――」
「しかも時間停止の際は、エンドフェイズにモンスターを二体、リリースしないとならない、が」
「なるほど、さっき墓地に送った【サクリファイス・ロータス】。直訳したら　生贄の蓮。あれが蘇るのね」
にゃおん、と黒猫
「多分、手札にはアレがあるんだろう。自分フィールドのカードを食べる、アレが」

〜〜〜〜

「では、【Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】！　特殊召喚――コイントスッ！」
咲夜の手の中で、表裏のコイン――表にレミリア、裏にフランドールを描いたコインが翻る――
夜空にきらめいたコインは、咲夜の手の中で――レミリアの微笑を見せる。
――表の効果　エンドフェイズ時に、自分フィールド上のモンスター2体をリリースし、次の相手ターンをスキップする。
「表の効果――決定。さらに、【非常食】で、私は自分の【ヴァル

ハラ】を墓地へ送り、１０００ポイントのライフを回復します」
＋１０００。残Ｌｉｆｅ９０００。

「これで、【サクリファイス・ロータス】が蘇生でき……」
疾風一陣――黒猫が呟いた刹那、目の前を鋭い風が突き抜けて、咲夜のデュエルディスク――墓地置き場に何かが突き刺さり、墓地から、蓮の魔物の悲鳴がこだます。

「……【Ｄ．Ｄ．クロウ】？　だが」
「私のネクロバレーは、墓地除外を……ッ！？」

カード咲夜が空を見上げれば、崖が――谷が……竜巻に飲み込まれ、吹き飛ばされていた。

「リバース・マジック【サイクロン】発動処理。
【ネクロバレー】を破壊。よって手札発動【Ｄ．Ｄ．クロウ】、手札からこのカードを墓地へ送ることで、相手の墓地カードを一枚除外する――
対象は、【サクリファイス・ロータス】」
「……上手い」
「まだ始まったばっかなんだし……楽しもうＺｅみっくしゅんッ！」

「……風邪引くから今のでさっさと終わらせたら良かったんじゃね？」
っつか、これ長く書き続けなきゃなんないの俺？

「……では、ターンエンド」

【手札1】
【場□□□□□□■□□】

幻想郷で遊戯王２（前書き）

前回の注意書きをごらんになろうぜ？

幻想郷で遊戯王2

楽園の素敵巫女、博麗霊夢
「はい、博麗霊夢ですッ」

東洋の西洋魔術師、霧雨魔理沙
「霧雨魔理沙ですッ！」

神の巫女、東風谷早苗
「東風谷早苗です」

巫女と魔術師で、巫女巫女スパーク
「……誰？」

東風谷早苗
「えっ！　……だって、何だかお祭りの匂いがするって、神奈子が……」

なんかの神、八坂神奈子
「へぇ、やってんじゃん」

さらに何かの神、洩矢　諏訪子
「やってるねぇ、やりまくってるじゃん！　邪悪な気配ぷんぷんだけどねぇ！？」

ALF
「悪かったな、ダークデッキで。あと筆者、神様なんだからちゃんと訂正してやれ」

フヒヒヒ、サーセン

初音ミク＜はい、ここから先は

殺符【殺意の波動】

殺意ミク＜小説風味でシカエシシマス……

一匹の黒猫が、とりあえず墓穴に眠った不思議な機械カラスを弄んでみる。

……不思議な空間だ。

紅魔館、森にひっそりと佇む巨大な紅い館、なのに異彩を放たない、まるでそこにあるのが当たり前のような洋館、

の、屋上――

空には満天の星空――

こんな星空は、気のあった友人たちや、思い人たちと共に過ごすのに限る。

ある意味、その二つは叶えられてんだけど……人生は複雑だ。

……日記小説のくせに、生意気だ。

否、事実は小説より奇なり、逆もまた然り。

「……銀髪（？）の美しいメイド二人に囲まれて、睨みつけるのはロリ吸血鬼はぐっ！？」

巨大なクソ紅い槍が、青年――ＡＬＦの脳天に叩きつけられる。

スペルカードが無かったら多分、即死程度の突っ込み。
だけでなく、周りにナイフが一斉に生まれ、嗚呼、時を止めたなとも
うＡＬＦにはお解かりのシチュエーションである。

「お嬢様をけなさないように」
「はい、では美少女吸血鬼」
だが時は動き出す――

しかし、展開されていた裏側の手札カードたちが舞い踊り、ナイフ
を何本が弾き飛ばし――
男らしく、残ったナイフは喰らっておいた。記念に貰っておこう。

「……屋敷の備品なので後で返してください」
「はぁ～い」
表情を読むのはメイドさんの必須技能らしい。
それを素直に従うのは、惚れた弱みとでもしておけ――

「んじゃ、俺のターン――」

【４ターン　ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ８０００
【手札３】
【場□□□□□
　□□■□□】

「ドローフェイズ、……スタンバイフェイズを処理（スルー）して、
魔法発動――【大嵐】」

【大嵐】フィールド上の魔法・罠をすべて破壊する。

黒猫、横切り――

「上手い、相手の伏せは４枚、これが成功したら、一枚で四枚破壊できる計算、このタイミングは上手い、が」
「そんなことを通じさせないのが、咲夜さんですよね？」
まるで信頼しきった紅美鈴の微笑。
惚れてまうやんけぇぇぇ！
「……ＡＬＦのデッキなんだけどな」

Ｃａｒｄ咲夜の足元のカードが一枚、立ちふさがる。
「それには、【魔宮の賄賂】を使用します。
相手の魔法罠を無効にし、代わりに相手はデッキからカードを一枚ドローできます」

薄赤に彩られた縁の中で、小汚い男が小判を誰かに手渡している姿。
その男が小判を投げつけ、ＡＬＦのデッキから、一枚のカードが手札に加わり巨大化する。

天空に立ち込めた薄雲は、一瞬にして晴れ渡り星空へと戻る。

「……わっちゃぁ、何これ？　むっちゃ綺麗ジャン、エフェクト（リアル効果処理）。やっぱリアルはえぇな～」
「いや、読者にゃ伝わらねぇから」
よぎる黒猫、ボケるＡＬＦ……

「そういえば、地味にあの『賄賂』、くそ高いレアカードだったな」
ごちる猫に、ＡＬＦ曰く。
「ん、３０００円ぽっちで手に入る、っつか買わないがな」
「ほほぅ」
「ゲーム買ったほうがあと二枚手に入る」
「６０００円で絶版だな」

「はいはい、超レアカードだって言いたいんですね。そんなカードを敵に渡して、何が言いたいんですか」
「俺の咲夜さんへの愛」
「６０００円程度だそうです」
絶妙な猫の突っ込みに、空中で滑るＡＬＦ。よい子は真似しないように。

呆れるカードの精霊、ＳＡＫＵＹＡ。
あ、コッチ（カタカナ）の方が語呂いいかも。
「どこぞの暴走族やアイドルじゃあるまいし、止めてください」
「東方のアイドルの一人ではある」
「私はあくまでメイドです」
「え？　悪魔でメイド？」
「黒執●に嵌って、メイドを忘却してくだされば本当に嬉しいんですが？」
はい、危険球禁止。

「……ついにカードの私が電波っちゃったのね」
しみじみと本家、厳粛で瀟洒なメイド。

「で、俺のターン続行……なん、だけど――」
今引いたカードをじっと見据え――

「……咲夜さんも頑張ってくれたし、俺も頑張るか」
「その嫌らしいにやついた笑み止めれ」
『そして手札を使い果たして、戦えなくなるんですね？　わかります』

……？
……？

「……今、教祖（マイミク）の声が聞こえた！？」
マイミク＝ミクシィーの友人のこと。
「～ですね？　わかります。って元ネタを知らない某友人教祖？」
「俺も知らないよ！　……なんでなんでッ！」
猫とＡＬＦが二匹（正しい表現）で大慌て。

「さらなる電波を受信してないで、さっさとしてください。ゲーム長引かせたら公式ではアウトですよ」
「……一応、スペルカード式闇のゲームなんだけど……」
「いや、読者が飽きます。さっさとデュエルを続けてください」
「んじゃ、咲夜さん――泣かす！」

今、魔宮でドローしたカードが漆黒の翼を広げて降臨する。

「【ＢＦ－黒槍のブラスト】！　俺のデッキの阿部さんだッ！
決め台詞は『掘る！』『ウッホッ！』『やらないかッ！』」

現れた漆黒の人型鴉、槍装備は目に涙を溜めるどころか、器用に涙を流してＡＬＦを恨みがましく睨みつけています。

「……私を、掘る気ですか」
「……サーセン、調子乗りすぎました」
かなり瀟洒なお声で咲夜さん本家――いや、笑顔でマジ切れほど恐ろしいものは無い、の見本。

「一つ言っておきますが、女性は下品なネタは嫌いなものです」
「知ってるよ。だから言うのさ」
「？」
「……俺、他人嫌いだしぃ～」

「嗚呼、なんちゃって人見知りでしたっけ。飛空する臆病者（フライドチキン）……」

……場、停止。

「……すごい、咲夜さん本家。ついに空気の時も止めた！」

「うるさい！　さっさと進めなさい！」

真っ赤な咲夜さんでした。……乙。

「では、気を取り直して『うっほっ、良い鴉』と誘われて、特殊召喚ッ！

【ＢＦ－疾風のゲイル】ッ！

こいつらは同盟カード以外のＢＦ（ブラック・フェザー）のカードが存在するとき、手札から特殊召喚できる。

……しかも、二体ッ」

二枚のカードから、小柄な漆黒の鳥が二匹、竜巻を伴って現れ、咲夜二人に暴風を浴びせかける。

「おぉ～良いアングル！　良いアングルッッッ！（パシャパシャパシャッ！」

「しゃ、射命丸　文ッ！？」

なんか別の鴉まで呼び込んだ模様……

同じ漆黒の翼を持つ、妖怪にして賢人――天狗。射命丸　文。

「ちわ～！　何かお祭りやってるってんで飛んできました～！」

「来ましたじゃないよ！　何取ってんの！　後で現像して焼き増ししてくれ！」

「駄目です」

「５０円！」

「アナタの咲夜さんへの欲情はその程度ですか」

呼び出された小柄な鴉二名、遣る瀬無し――
と、そんな馬鹿を許さないのが――

「【不夜城レッド】！
うちの咲夜は高いわよ！」

お嬢様、お怒り――目は笑ってます。

「ならば全カード売って買う！」
「お前も死ね！　【スピア　オブ　グングニル】！」
「どこの北欧神話ですかアナタ！」

「北欧神話にそこも何処も無いと思うがにゃ～」

馬鹿をしている隙に、二匹の小鴉は一斉に、咲夜のモンスター【Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】に群がり、
三体の足元に、白文字で数字が記載される。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄは【３１００】
対して二匹の小鴉はお互い【１３００】……だが、二匹が怒涛のくちばしを突きつけ、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ……巨大な機械天使はもろくも崩れ去り、辛うじて円盤型の概観だけを残し、その場にとどまる。
数字は【１５５０】、【７２５】と小刻みに半減していた。

「ＢＦ－ゲイルの効果発動！　こいつは１ターンに一度、表側表示のモンスターの攻守を半減させる！
大型モンスターＬｖ８のＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄを対象に効果発動――
しかも二体だから、結果――１／４！」

「伝説のブルーアイズホワイトドラゴンが３０００と言う基準で最高値。
この最高値を上回るモンスターも増えてきたが、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄもその一角。
それをあっさり倒しのけるのが……日に日に進化して行く、遊戯王のカードってことだ」
「猫君、なんか力説してるね」
さっきからちょろちょろしていたので、黒猫を確保、抱き上げる美鈴。

「さらに立て続けるぜ！　伏せていたモンスター【ネクロガードナー】オープンッ！」
裏側表示だったカードが立ち上げられ、イラストに描かれた無骨な長髪戦士が徒手空拳で構える。

「ネクロガードナー　Ｌｖ３！」
「疾風のゲイル　Ｌｖ３は二体ッ！」
「さらに黒槍のブラスト　Ｌｖ４！」

【場□□□□□
■■■■□】

「疾風のゲイルはチューナーモンスター！　よって、ここでシンクロ召喚を宣言する！
カード咲夜、何かリバース発動はあるか？」
「……無いわ」
「受理――【疾風のゲイル】、【ネクロガードナー】にチューニング！」
漆黒の小鴉が嘶くと、焔纏う星屑が三つ輝き――ネクロガードナー

と呼ばれた戦士に纏わりつき――闇色の黒焔が二体のモンスターを飲み込む。

「闇誘う、誘われ死、幻想郷――
紡がれる力に誘われて、その正義を無駄に振りかざせ！　シンクロ召喚ッ！」

黒焔から飛び出した――十手。その柄に繋がれた紐を握り、時代かぶれた歌舞伎男が現れる。

「ゴヨウ・ガーディアン。Ｌｖ３＋３のＬｖ６モンスター！　だが、Ｌｖに似合わず、その攻撃力は２８００！」

「シンクロ召喚ってのは、チューナーって書いてあるモンスターとそれ以外のモンスターをフィールドから墓地へ送ることで召喚できる、特殊なモンスターの召喚のことね」
「ふぅん……強いの？」
「強いから召喚するんじゃない」
美鈴……猫の喉を擽りながら……なぞの歌舞伎マンにちょっとびびる。
顔が、歌舞伎すぎてピエロみたいだから……

「姿にだまされちゃ駄目だよ。
原作じゃ主人公のモンスター奪っちゃう奴だし、現大会でもフィールドにでたら一筋縄ではいかない程度の攻撃力でもあるんだから。
攻撃力２８００」
「さっき、３０００が最高とかいってたわよね」
「そう、それだけ３０００以上ってのはすごく出しにくい。基本コストもあるし、
あと４０００って攻撃力もあるけど、ぶっちゃけそれだけの攻撃力

を出すには様々な条件を満たさないと召喚できない。
基本は、フィールドのモンスター三体リリースとか」
「その三体をリリースって？」
「フィールドの三体のモンスターを墓地へ送るの。
でもね？　基本、雑魚モンスターの攻撃力を１０００と換算して、３０００の総攻撃力を捨てて、召喚するに値するかどうか。
実際、ＡＬＦらレベルだと、３体もモンスターがフィールドに居る時点で、『圧倒』と呼べるような展開でもあるから。
それにそんな大型モンスターは、圧倒されている際、手札で死に札
　使えないカードとして残ってしまうのが関の山」

「まだまだ終わらない！　今度はゲイルとブラスト！　お前らは本家召喚――」

再び黒い炎が舞い踊り、ゲイルと呼ばれた小鴉が紅い焔の星を三つ生み、さらにブラストなる大鴉の周りを浮遊し――大鴉もまた四つの焔を生み出し――輪を描いた黒焔に、一直列に並び――爆発――

「翼挿す、舞い踊れや、幻想郷――
宵闇に踊れ、我ら星々――黒翼広げて舞い上がれ！――シンクロ召喚」

紅色の月を背に、紅魔館の尖塔に現れた黒衣の怪人――
いや、黒衣に見えるそれは、それの鎧。黒光りする外骨格と鉄色の翼――
もはや鴉ではなく、鴉を模した何かと思しき、漆黒の怪人は――その翼を広げて高らかに嘶く――

「ＢＦ－ブラックフェザー……アーマード・ウィング！　戦闘破壊無効、及び戦闘ダメージを０にする特殊モンスター！」

「……ロクでもない連中を二体も」
「でも、これで彼手札、１枚じゃない」

【手札　１枚】
【場□□□□□
□□■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７
【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６

「いいや、め～りん……戦闘破壊できないってのは、ようは場に残りやすいって意味だ。
モンスターを破壊＝戦闘破壊ってのがまず基本」
「……そう、厄介なのね」
「ただな、カードのＳＡＫＵＹＡさんが、伏せの中に」
「……？」
「罠カード、モンスター破壊は何も戦闘だけじゃない。罠にゃ基本、そんなのが結構あんのさ――」

ＳＡＫＵＹＡ　Ｌｉｆｅ８０００
【場□■■■□
□□■□□】

咲夜　Ｌｉｆｅ　９０００
【場□□□□□
□□■□□】
【Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】７７５（３１００）・７７５（３１００）
Ｌｖ８

二体の怪人を従えたＡＬＦ……無論、
「……じゃあ、まずはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄにゴヨウ・ガーディアン！　バトルッ！」
歌舞伎マンが跳躍し、紐で括りつけた十手を、鉄錆びた機械天使に叩きつける刹那――
「トラップ！」
――ッ！
――ッ！！
――！
カード咲夜の伏せられていた、二枚目が開かれる。
全てを遮る、巨大な光の壁――
「【聖なるバリアーミラーフォースー】！　遊戯王の代名詞ともなる、相手フィールドモンスター一掃除去カード！」
「相手の攻撃表示モンスターを全て破壊するトラップ！　ＡＬＦのモンスターは全部攻撃表示！！」
咲夜の叫びと黒猫の解説を……
ＡＬＦは
「いや、バカ猫、その定番な台詞、頭悪そうだからやめれ――」
と言って、自らゴヨウ・ガーディアンなる歌舞伎の前に立ちふさがり――

十手が弾かれ、同時に弾かれた箇所から放たれた無数の輝きが――
すべて――ＡＬＦへと降り注ぐ！？

「ターンプレイヤー特権！　手札から速攻魔法発動！　【我が身を盾に】！
こいつはぶっべら！？　自分のごばっはっ！？　ちょ、何コレ！？
　クソ痛にぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

閃光に包まれて、ＡＬＦ吹っ飛ぶ。
華麗な放物線を描いて……空中停止。
どうやらデュエルは放棄できない模様……ふわふわふわ～

「【我が身を盾に】は、相手が「フィールド上のモンスターを破壊する」効果を持つカードを発動した際、ライフを１５００払うことで無効にし、破壊する【速攻魔法】カード。
……内容はまさしく、自分の命を盾に、モンスターを守るってことだが……」

現在、ＡＬＦ失神中――

ゴヨウ・涙目――

「……挫けてたまるか！　ゴヨウ！　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを嫁にしろ！」
『Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！』

再び十手を繰り出して、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを貫き――粉砕。
その際、砕けた天使の破片が咲夜に降り注ぐが、彼女は平然と全てよけきる。－２０２５。

「まだまだ！　ゴヨウの効果発動！　お縄を頂戴ッ！
戦闘で墓地に送った相手モンスターを、自分のモンスターとして守備表示で特殊召喚できる！」

貫いた十手……を引き抜けば、その十手にはＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄが巻きついており、
ゴヨウが引き上げれば、ＡＬＦのフィールドに連れて行かれ……防御体勢のまま居座る。

「そして、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄは一度、墓地へ送られたことで、特殊召喚扱いとなる！
よって、攻撃力は３１００に戻り、次の俺のターンから、俺のモンスターとして使役できる！
さらに、【Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】のコイントス！」

翻る、ＡＬＦ使用　フィガロコイン。
エドガー・フィガロの表情が表に微笑む。

「表効果処理……時を止める効果が入ります」
「……な、酷くないか？」
「嗚呼、これは酷い――そして、何より。
今」

咲夜　Ｌｉｆｅ　６９７５
【場□□□□□
□□□□□】

「咲夜さんの場に、モンスターも何もない。ダイレクトアタック可能。

６９７５から直接、あの鴉マンの攻撃力２５００が引かれる」
「……どういうこと？　猫さん」
「さっきのＡＬＦの『我が身』でわかったが。このスペルデュエル、闇のゲームと一緒でな……怪我すっぞ」
「ＢＦ－鎧翼！　お前はカード咲夜の裏守備モンスターへ！」

「は？」
「へ？」
猫と美鈴、困惑――

「……情けですか？」
鋭い視線の咲夜さんだが、鴉怪人は拳を握り、裏側表示のカードを殴りつけ――
表に晒されたのは、先ほどＡＬＦが使用していた――

「ネクロガードナー……破壊され、墓地へ送ります」
「……やっぱ、ネクロだよなぁ」
カードの咲夜は、憮然としながらネクロガードナーを墓地へ送り、ＡＬＦは……首を傾げながら、

「嗚呼、別に情けじゃなくって駆け引きね。
メタモルだったら、嬉しかったな～って話。俺、手札なくなって心許ないし――」

「ＡＬＦの布陣は攻撃力を徹底的に高めたモンスターで場を制圧する、単純パターン。
ならば、魔法罠、モンスター効果で崩すのが定石――それをカバーする『我が身』もすぐ使っちまった」
黒猫、分析分析――

――庭――

霊夢曰く

「……あの猫、引き摺り下ろしてきて良い？」

答える、炬燵天使。

「良いわよ。っつか私が引き摺り下ろそうか？　自分だけ目立って」

同調する黒魔法使い。

「まぁ、私らより目立ってる以前に、ルールわかんないし」

教える色魔法使い。

「えっとね、ようは攻撃力が高ければ良いのよ」

「あいつ圧倒してんじゃん！」

寒くて降りてきた、パチュリー・ノーレッジ、曰く。

「くしゅんくしゅんくしゅんっ！　……うぅぅ、寒ッ。ジャッジなんてやるんじゃなかった」

「あら？　また喘息？」

「あんなのに付き合ってられないわよ。でも……」

たしか、咲夜のデッキに４０００入ってなかったっけ？

「俺はこれでターンエンド、ッつか何もできんくなった」

【手札　０枚】

【場□□□□□
　□■■■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７

【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６

【アルカナフォースＸＸＩ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】　３１００／３

１００　Ｌｖ８（守備表示

【５ターン　カード咲夜】
【手札０】
【場□■□■□
　□□□□□】

「さぁ～って、不味いぜ？　……チーム咲夜、どっちも手札詰まり……」

「さぁ？　どうかしら」
黒猫の不吉な台詞を、カードの咲夜は一笑に伏す。

「でも、カード伏せてターンエンド」
「何もしないのかよっ！」
黒猫の乗り突っ込みは、尻尾で行われる模様。

「いや、手札詰まりだろう。そっちのデッキは罠・魔法が多く、モンスターは効果で補って召喚補佐をしてるし」
とはデッキ製作者のＡＬＦ。

「ただなぁ、『弾圧』とか引かれてたら、後怖いんですけど」

カード咲夜、心で舌打ち。
……なんでそう勘は良いのよッ！

【手札０】Ｌｉｆｅ　８０００
【場□■■■□

□□□□□】

【6ターン　十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　６９７５
【手札１】
【場□□□□□
　□□□□□】

「では、私の番ですね――」
白い指先が一枚のカードをめくり――

そして、時は止まる。

「……スペルカード【プライベート・スクウェア】発動です」
「！？」
ＡＬＦ、表情を引きつらせ――停止。

「スペルカードッ！　咲夜さんの奥義じゃないですか」
「カードテキストを読ませていただきます。
【このカードはドローした時、エクストラデッキの『十六夜　咲夜』を提示して発動する。
このターンのエンドフェイズ後、次のターンを再び自分のターンとしてプレイする。
このカードの発動は無効にできず、相手は次のターンのエンドフェイズまで魔法、罠を発動することは出来ない。
次のターン、自分は魔法、罠を各一枚、召喚、特殊召喚は一度しか使用出来ない】
……確かに、時間停止中の動作は――」

「わずかですけどね――」
咲夜……氷の微笑。

～～～～

炬燵で霊夢
「……あれ？　何」
「……ぜ？」

「ぜって何よ――って、咲夜のフィールド！」
早苗が指差す先には、カードを召喚し終えた咲夜が凛然と立ちふさがっていた。

【手札０】
【場□□■□□
□□■■□】

場に現れた白亜の馬――そして不細工な機械ロボット。
そして……表側に表示された、一枚の魔法罠――否、小さな石となったモンスターが一体。

合計三枚のカードが――十六夜　咲夜の前に展開されている。

「ッ！　最初のスクウェアドローのターン……【宝玉獣　サファイヤ・ペガサス】を召喚ッ！
そして効果で宝玉化、魔法罠扱いにした、【宝玉獣　アンバーマンモス】を召喚し、エンド。
次のスクウェア・ターンでドローした【カードガンナー】を召喚ッッッ！」

「さすがこのデッキ製作者、お察しが早くて助かります。では、【カードガンナー】の効果は？」
「は、発動済みッ！　デッキからカードを三枚まで墓地へ送り、１枚送るにつき５００攻撃力を上げる」
「もともとは４００の雑魚モンスターですが、破壊された場合、デッキからカードを一枚ドローできます。墓地へ送られたのは……」

【宝玉獣　トパーズタイガー】
【宝玉獣　エメラルドタートル】
【宝玉獣　アメジストキャット】

「ッッッ！？」

〜〜〜〜

「何このチートッッッ！」
カラフルロリマジシャンが絶叫を上げた。
「チートって？」
「カンニングとかそんな意味よ。
あのデッキ、宝玉ワールドには、宝玉獣はデッキ枚数上、一枚ずつしか入って無いわ！」
カードエクスクルーダーは回想する。
もともとＡＬＦが持っていたデッキは、炬燵権限（上位者は炬燵で冬を過ごせる程度の権限）により没収されていた。
そのうちのデッキ、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを主軸にしたデッキと、かつて姫にボロ負けし封印された、宝玉ネオスを融合したデッキが、現在　十六夜咲夜が使用している、Ｒａｉｎｂｏｗ　Ｗｏｒｌｄ……
「あんな綺麗に宝玉が三枚、重なるなんて……」

「有り得なくは無いわ。カードなんて運命の女神と一緒、気まぐれじゃない」
と諌めるのはさすがは、姉御肌、ダーク・ヴァルキュリア。
「ただ、相手は十六夜咲夜なのよね」
「へ？」
とぼけ霊夢――
「咲夜の特技、覚えてる？」
「……えっと」
「種無し手品」

～～～～

「ジャッジ――」
と呼ばれて、炬燵からもそもそ飛び出てくるパチュリー。
腕組みして考え込んでいるＡＬＦ。
「……下でチートとか叫んでるけどさ。俺は、咲夜さんがデッキを入れ替えた所なんて見て無いんだよな」
「うん？　えっと、反則を指摘したいのか」
「俺に指摘する理由はねぇってことを確認したいんだがいいか？ジャッジ――」
「ふんふん、じゃあ咲夜？　デッキを――はぁ？」
丸い顔が困惑にさらに丸まる。
「俺は咲夜がデッキを弄ってないって断言してんだよ。ジャッジ不要！」
『何でだよ！！』
「１　この状況、俺の圧倒中！　２　一方的な展開詰まんない！

３　俺の心がそう叫べと言った！」
「……徹底的な厨二ですね」
「チート程度でこのデュエルモンスターが勝てると思ってる連中の方がダサいね。
……そして、まだ咲夜さんのターンは終わってない」

【７ターン　十六夜咲夜】
【手札０】
【場□□■□□
　□□■■□】
【カードガンナー】　１９００（４００）／４００
【サファイヤペガサス】　１８００／１２００

ポンコツロボットが、手に備わった砲銃を、ＡＬＦの鴉怪人に向けて――

「……バトルしますっ！」
「１９００ｖｓ２５００――賭けに出るか！」

ポンコツ機械　カードガンナーの砲撃を華麗によけた鴉怪人、アーマードウィング。
そのまま拳を叩きつけて――カードガンナーを粉砕し――

「えっ？」

ＡＬＦの目の前に、白銀の巨龍が立ちふさがっていた。

「では、厳粛で瀟洒な時間を始めましょう」

【８ターン目　十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　５０７５

【手札０】

【場□□■□□
□□■□□】

【究極宝玉神　レインボードラゴン】

魔法【宝玉獣　サファイヤペガサス】

幻想郷で遊戯王３

―序章　咲夜の世界で―

【７ターン　十六夜咲夜】
【手札０】
【場□□■□□
　□□■■□】
【カードガンナー】　１９００（４００）／４００
【サファイヤペガサス】　１８００／１２００

ポンコツロボットが、手に備わった砲銃を、ＡＬＦの鴉怪人に向けて――

「……バトルしますっ！」
「１９００ｖｓ２５００――賭けに出るか！」

ポンコツ機械　カードガンナーの砲撃を華麗によけた鴉怪人、アーマードウィング。
そのまま拳を叩きつけて――カードガンナーを粉砕し――

ドロー……世界停止。

「……またぁ？」
調子崩れた口調で、十六夜咲夜はその場にへたりこんだ。
「いたたた――うぅん、ダメージ覚悟で殴ったけど、なんなのよ、この怪人！」
停止しているアーマードウィングに無駄と知りながら蹴りいれる。

……蹴った足が痛かった。

今しがた引いたカード。
時符【プライベートスクウェア】……ドロー後、強制発動する遊戯王ではオリジナルカード。
こちら（東方P）では咲夜のスペルカード（ボム）。

「でも、引いたら強制発動するなんて、私の能力とは違うじゃない」
「いんじゃない？　お陰で時間稼ぎできたんだし」
「ひゃっ！」
咲夜の背後で黒猫がささやき、彼女らしくなくビックリした。

「うぃっしゅ」
「……私の世界（時間停止状態）なのに何で動けるのかしら？」
「さぁ？　多分、ＡＬＦのデュエルスペルで上書きされてんじゃね？」
「私らはデュエルモンスターだし……こいつらは今、その影響下にいるわけだしね」
と、黒猫の傍には――黒銀の翼を翻した、ダーク・ヴァルキュリアが舞い降りて。
ダークなヴァルキリーは硬直した、黒い怪人、ＢＦをこつこつを叩く。動かない……どうやら影響下にあるといいたいらしい。

「まぁ、立ち話もあれだし。下でお茶しない？　下で膨れっ面してる小娘もいるし」
何となく察しがついた咲夜だが、相伴することにした。
ぶっちゃけ、単に休憩したかった。

「はふぅ～」
ヴァルキュリアの淹れた茶に感服しつつ、彼女をメイドの一人に起

用しようか思案しつつ
「で、咲夜！　アンタ、カード入れ替えてたでしょう！」
怒鳴りつけるロリマジシャン、カードエクスクルーダーに、ＰＡＤ
疑惑のあるメイド長は……はにかんだ笑みを浮かべたまま。

「……てへっ」
舌を出して惚けるシーンは皆の想像力でカヴァーしてください。

「てへって、自分の年齢を考えて言うべきだと思うが」
「失礼ね、私はまだ十代後半よ」
「……ＡＬＦより年下か？」
「えっと、紅魔発売から年立ってるから……」
「作者あとがき、２００２年、ってことは7年たってるから……」
「……コホン、止めましょう。年齢の話は」
咲夜さん、咳払いして話題変更。

「それに、カンニングの件はＡＬＦ自身も認めてくれたわよ」
「……あのバカ」
「デュエル開始前に」
カードの精霊二人が、放物線を描いた茶を放つ。
プヒュリ――

「このデッキ」と彼女は自分の持っていたデュエルディスクから、
Ｒａｉｎｂｏｗ　Ｗｏｒｌｄなるデッキを炬燵の上に置き、
「カードの順番がよく巡らない、それを回らないと言うらしいけど、
本当に回らないのよ。
宝玉獣は単体一枚では、雑魚モンスター程度だし、攻撃力も低いも
のばかり。
宝玉化、魔法罠に変えるのも、通常戦術なら大したこと無いけど、
時間が掛かるって――ＡＬＦが言ってた」

「敵に何塩送ってるの！」
「本人は愛を送ってるって」
「死ねば良いわ！！」
Ｃエクスクルーダー、マジギレ。

「……通常は、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄを牽制にしつつ、宝玉を並べて行くのがスタンダードなんだけど、
……さっさと終わらせたかったし」
「マテ！」
Ｃエクス、咲夜の顔面に顔を突きつけてきて――

「ま　さ　か」
「……【おろかな埋葬】って順制限、二枚しかいれられませんよね？　一度に手札に二枚くるなんて偶然ですよ、偶然」
「こ、この女狐！」
激昂するロリに、惚けながら笑うメイド、……を眺めつつあきれる黒い天使。
黒猫は咲夜の膝で丸くなりながら、
「……いんじゃね？　どうも、もうかたっぽの咲夜がそれフォローってるし」
「？」
「いやな、序盤のＡＬＦのサイクロン。
あれを【賄賂】で止めたら、咲夜のワンキルは確定してたんだろ？」
と、茶を飲んでいたヴァルキュリアが、湯飲みを下ろす。

「ん、だが【ネクロバレー】は『フィールド魔法を破壊される』前提で組んでいる。
【ネクロガードナー】、墓地除外のアイツを仕込んでいたから、判断は半々だったんだろう。
さらに、ＤＤクロウ、ＡＬＦのデッキで、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの効

果を止められる鳥獣族は、多分あれ一枚のみだ」
「……まさか」
「気をつけろ、ＡＬＦは普通に引きが強い。手札０の時点での引きならなおさら強い。
いや、強くなるように無意識に構築している――制限カードに指定されるカードは、一枚のみで相手と互角に渡り合えるレベルのカードも多い」
「ちょっと！　ヴァルキリー！　あんた、どっちの応援してるのよ！」
「ふむ、ではエクスクルーダーはＡＬＦの味方なのか？」
「……あ？　違う、私は不正デュエルが嫌なのよ！」
「ＡＬＦもトリック・デュエルはできるぞ」
「……マジ？」
「咲夜の種無し手品とは違い、単なるカードマジックだがな。
サンホラの最後のオフ会に参加した連中なら、多少は知っているはずだ。無駄に披露してたし。
もっとも、デュエリストは誰独りいなかったがな。カードマジックだって基本は」
「トランプの手品と一緒です。欲しいカードがあれば、デッキにいれず、手元のリストバンドとかに仕込んでおけば良いんですよ」
「それ！　どこのバンデット・キースッ！」
「ふふ、さすがにそれは露骨ですから今回は使っていません。と言うか、私、カードを入れ替えてもいませんよ？」
「……へ？」
「ただ、最初のカット＆ａｍｐ；シャッフルを互いにしなかっただけです」
ぶっちん――Ｃエクス、手を伸ばしてＲａｉｎｂｏｗ　Ｗｏｒｌｄのデッキをちっちゃな手で強引にシャッフルシャッフル。
なんか、擬音にシュゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴとかすごい音なって

るけど、カード大丈夫カナ？

「これで、よし！！　だいたいレインボードラゴン！　あんた、ＡＬＦからは一段、思い入れのある出会い方してるんだから、ちゃんと戦いなさいよ！」

「……」

Ｃエクスの言葉に、ダーク・ヴァルキュリアは……

Ｃエクスの頭を、ポフポフ撫でた。

「思い入れ、とは？」

「ん？　ＡＬＦ、東京へ出かけたとき、観光のついでのツインタワーで、お土産と同時に……カード買ったのよ、大量に」

「……観光地まで何やってるんですか」

「お土産買ったら割引券貰って、ここでしか使えないからって――その際に、引き当てたのが【究極宝玉獣　レインボードラゴン】だったわけ。

単にそれだけよ」

「……でも、印象に残ってるんだって……」

「Ｃエクスはね、限定カードだけど、金出せば一発で手に入る程度の、言っちゃえば簡単に手に入ったカードなのよ」

「……私らみたいに、ランダムでパック入りしてるのとは違い、入手確定の決まっていたカードは――そう言う、引きって言う運命が無いの。

それって、カードからしたら劣等感の一つなのよ」

ポフポフ……ポフポフポフ――

「……彼女らのような、限定カードと言われていても、デュエルで役に立たないカードたちは、売り払われるか、最悪、どこかでごみになるか。

エクスクルーダーは良い方よ、アナタ、アイドルカードなんだから」

「……ヒトと一緒よ、好きで自分に生まれたわけじゃないわ」
「お前ら、内容深ぇよ――」
とカード女二人を諌める黒猫。

「……でも、悔しいじゃない」
「はいはい、エクス。もう良いから」
「……次は私が出てやる」

「まぁ、貴方たちの悩みは悩みで、私は――」

この戦いを制するのみ――

「では、お茶会終了。――咲夜さん、配置に戻りましょう」
「はい――」
ヴァルキュリアが手を引いて、再び咲夜を屋根上へと運び――

「そうそう、十六夜咲夜？　これだけは伝えておきたい」
「何でしょう？」
「我が主の余興に付き合ってくれたことに……感謝する」
咲夜を屋根上に運び終えた闇の天使はそう告げると、
従順なメイド長は静かに答えた。
「私はただお嬢様の命令に従っただけです」
静かに微笑んだ。

「では、再開と致しましょう」
ディスクセット、リスタート……

【８ターン目　十六夜咲夜】
【手札０】Ｌｉｆｅ　６３７５

【場□□■□□
□□□■□】

【サファイヤペガサス】　１８００／１２００

7ターン目、バトルフェイズ終了後、そのままペガサスを突貫させても無意味なので、エンド。

【プライベートスクウェア】の効果により、再び咲夜にターンが回る。

時は、ゆっくりと書き換えられて行く。

「では、一枚――もう何を引くかは解りませんが――」

爪引かれた一枚のカード……

「……【死者、蘇生】……」

「げっ！　起死回生の一手――」

カットシャッフルを行った本人が、目を丸めて叫ぶ。

「起死回生……でもワールドは奪われてるじゃん、なぁんだ」

「さて、さっきから博打とか何だと持てはやされていましたけど」

咲夜、【死者蘇生】を発動――

咲夜の前にエジプトのアンクを象ったアクセサリーが現れ、アンクが砕け散った後に死者蘇生のカードが別のカードに入れ替わる。

「今度はちゃんと、本当の博打を見せましょう。帰ってきなさい、メイドロボ」

別にメイドロボではないけど、両手が大砲になった、簡素な機械ロ

ボット、カードガンナーが再び現れ……

「効果発動！　デッキから三枚を墓地へ」

「ふんっ――もうご都合なんて……」

『ルヴィィッ！』『シャァァァッッ！』

それはまるで威嚇するかのように叫ぶ、墓場からの慟哭。

「……うそ」

「墓地へ、【宝玉獣　ルビーカーバンクル】【アルカナフォースＸＸＩ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】【宝玉獣　コバルトイーグル】を墓地へ送り、

カードガンナーの攻撃力を５００×三枚分アップ――」

墓地の中で呻く五体の宝玉獣たちが、薄い姿のまま咲夜の背後で唸り――

フィールドのペガサス、宝石となったマンモスの二体と重なり――

時間停止したＡＬＦを睨む。

「……バトルフェイズ！　カードガンナー、再びあの黒い怪人へ……」

放たれた大砲……を、時間停止していた世界が動き始め、黒い怪人――ＢＦアーマードウィングはその砲撃を胸板で弾き返し、再びその拳をぶつけ、粉々に打ち砕いた。

「うぅ――」

その破片が、咲夜の全身に降り注ぎ、彼女のライフとともに全身に痛みを走らせる。

Ｌｉｆｅ　５７７５

「……霊夢のお札の方が、よっぽど痛いですね。カードガンナーの効果発動により、一枚引きます」

ドロー……そして、咲夜の表情が一瞬、引きつる。
短い時の中、ペガサスが諭すようにうなずき、咲夜は片手を再び黒い怪人へ向け、

「バトル続行！　お逝きなさい、ペガサス！」

一瞬の嘶き、そしてペガサスのなのにユニコーンの持つ角から稲光を発し、ＢＦ－アーマードウィングに叩きつけるが、ビクともせず、逆にその稲光が反射して、ペガサスを貫く……

貫かれたペガサスは、蒼い宝石となってフィールドに残る。
紫電の一部が咲夜に跳ね返るが、彼女はどこ吹く風かと言う風情。
Ｌｉｆｅ　５０７５

「……う、嘘だ。こんなの都合、ご都合！　都合よすぎだよ！」
「嗚呼、ＡＬＦの望んだ展開だな」
涙目になったカードエクスクルーダー。それを諭すようなダーク・ヴァルキュリア。

咲夜の場は、もはや宝石となった獣二体。この宝石は単体では意味を成さない。
壁モンスターでも無いゆえに、ライフポイントは直接削られていく。

「何で何で何で！」
「……カードとは、自分で組んだカードになればなるほど、最初は

思うようには動いてくれない。
どれだけすごい戦術、コンボ、カードの引きを描こうと、歯車は、必ずしもかみ合いはしない。
だが逆にどれがどう組み合わさるかは、組んだ本人にすら時として予想を超える。別に大したことは無い」
「……はぁ？」
困惑するエクスクルーダーに、ヴァルキュリアは、
「ただ歯車が噛みあったのだよ。宝玉獣は、歯車を噛み合わせるデッキ――驚くことは何も無い」

「では、お二人の予想通りのカードを、提示しましょう」
「レア」「……ヴァリュー」

二人の予想通り、そして宝玉デッキの要――デッキからカードを引きやすくする＝回るというなら、そのデッキを回すための、数少ない稀少なカード。
なお、大切なので言葉の意味を重複させました。

「【レア・ヴァリュー】発動。このカードは場の宝玉化した宝玉獣が二体ある場合発動可能。相手は宝玉の一体を選択し、私はそれを墓地へ。
そしてその後、私は二枚カードを引きます！」
そのための、ペガサスの犠牲。このカード発動条件は、場の魔法罠ゾーンに、宝玉獣が二枚なければならない。
ペガサスはそのために、咲夜に頷いていた。

さらに、隣の対戦者。カードの精霊の方の咲夜の時が動き出す。

「もう一人の私、私は【レア・ヴァリュー】の効果を発動しました」
「あら？　これが、プライベートスクウェアの効果ですか？　……

見事に再現しつくしてますね。無駄に」
「ええ……で、どちらを選びます？　琥珀のマンモスか、サファイヤのペガサスか」
魔法カードが開かれ、カードの咲夜は少し唸ってから、
「アンバーマンモスを墓地へお願いします」

「了承、そして二枚……」

今までに無い……獰猛な唸り声が響いた。
「えっ？」

ＡＬＦの目の前に、白銀の巨龍が立ちふさがっていた。

「では、厳粛で瀟洒な時間を始めましょう」

【８ターン目　十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　５０７５
【手札１】
【場□□■□□
　□□■□□】

【究極宝玉神　レインボードラゴン】　４０００／０　Ｌｖ　１０
魔法【宝玉獣　サファイヤペガサス】

そして、時は動き出す。

【９ターン目　ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　６５００
【手札　０枚】
【場□□□□□

□■■■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７
【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６
【アルカナフォースＸＸＩ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】　３１００／３１００　Ｌｖ８（守備表示・表側効果

「……【究極宝玉神　レインボードラゴン】。攻撃力、４０００」
墓地、フィールドに全７種類の宝玉獣が存在する場合のみ、特殊召喚することが出来る。
Ｌｖ１０　攻撃力４０００、神のカードと互角の攻撃力を誇るモンスター。

「はい、私のデッキの中では、最強の攻撃力を持つモンスターです。カードガンナー、そして……誰かさんのお節介でようやく呼べました」
慇懃な礼と共に告げる十六夜咲夜。
同時にレインボードラゴンも倣うように頭をたれ、

『久しいな、我が主』
「うぃ。……豪奢な光がねぇから、東京で会ったヴァージョン、ウルレアだな」
『覚えておいでか、マスター』
「忘れるわけねぇ。あんとき他にもどっかりレアカード当てたんだから。筆頭がお前だっただけだし」
上空に浮かびながら、偉そうにうんちく告げるＡＬＦだが、なぜ顔をそっぽ向く？

『……では、敵として合間見えたことを今、ここに』
「……何を今更。姫っちのホルスにボッコボコにされた程度の攻撃

力４０００に誰が負けるか」
『ならばこちらも、いつもいつも陰に隠れる何ちゃって人間に！
俺が負けるか！』
「うっしゃ！　バッチこんかいッッッ！　きゃぃんって負け犬泣きさせちゃる！」
『お前こそ、咲夜様の靴を舐めやがれ！』
「様付けっ？！　お前そう言うキャラ位置で良いのか！
っつか靴舐めるならＯＫ！　見上げれば絶対領域の向こう側、伝説の桃源郷が拝めるＺｅ！」
『その前に灰に還す！』
「ふっ、俺が塵になったら地球環境が悪化するぜ！　地球に厳しい成分でできてるからな！　Ｔｈｅ　バファリンの対極」
巨大なでっかい龍と、根性のちっちゃな人間に対して、メイド長は
――
「……まぁ、最近は寒いから毛糸のを履いてますし」
『「何答えてるのッ！？」』
バカ主とバカ龍がシンクロした。
「……」
ヴァルキュリア、頭痛のポーズ。
カードエクスクルーダーに至っては、炬燵のミカンに顔を埋めて、顔真っ赤。
「……恥ずかしい」
「えっと、そっか……あのカードもＡＬＦのだっけ」
「なんか強そうだな、アイツ」
今回ようやく登場、

「どうも、博麗霊夢です」
「うっす、霧雨魔理沙だ」
「えっと、東風谷」「やっほ～、射命丸　文でぇ～す」「リグルだよ」「そ～なのか～」

「いっぺんに喋るな、……お前らなぁ」
と、炬燵の真上で一括した黒猫を、べしっ！と叩く。

「炬燵の上に乗るなぁぁぁ！」
「貴方もよ、橙（チェン）」

炬燵の上に乗っかる化け猫の式、橙。
と、その主にしてやはり、妖怪の式、八雲　藍（ラン）。なお、東方１の巨乳らしい。（東方なんでもQ&A参照）

……べしぃ！

黒猫ｖｓ化け猫、開始――

「……こっちの戦いは放置して」
と、屋根上から降りてきた我らがお嬢様、
「さぁ、見ものだわ。綺麗だわ！　何あのドラゴン……無茶苦茶格好いいじゃない！」
「性格は主に似てしまい、申し訳ありません」
謝る炬燵ヴァルキュリア。
なお顔面をミカンに突っ伏し中のカードエクスクルーダーは、自分がデッキをシャッフルしたこともあって、ちょっと心苦しい模様。

「究極宝玉神レインボードラゴンは二つの効果があります。
一つは攻撃力をＵｐ　今は宝玉化したサファイヤを墓地に送れば１０００ポイントうｐ可能です」
「うｐ？」
闇なヴァルキュリア、どこか化けの皮が一枚はがれた。
「失礼、アップです。
続いては、墓地の宝玉を除外することで全フィールドのカードをデッキに戻す、超絶リセット効果を持ちます。
この場合、手札をより多く持っていた者のアドヴァンテージがより高くなります」
「ふんっ、全然わかんないけど、わかったわ」
お嬢様、無駄なカリスマがあふれ出ています。

「つまり、現時点、誰も手札が０に近いから、効果を使えばドロー合戦は必至と言うことね」
と呟く一応ジャッジ（審判）のパチュリー。

「そゆこと、だが――今は、俺のターンだぜ！　ドロー！」

【９ターン目　ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　６５００
【手札　＋１枚】
【場□□□□□
　□■■■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７
【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６
【アルカナフォースＸＸＩ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】　３１００／３１００　Ｌｖ８（攻撃表示・表側効果

「ワールド、攻撃表示！

続いてアーマード・ウィング……レインボードラゴンに強襲！」
「？　私と同じ真似を？」
「違うね、アーマードウィングは戦闘破壊無効、ダメージ０だけじゃなく、もう一つの効果がある。
むしろ、この効果のために、この戦闘無効があるのさ！　レインボードラゴンに楔カウンターを乗せる！」
飛翔――加速をつけたアーマードウィングが、白銀の巨龍めがけて突進を繰り出した刹那――
「アーマードウィングは戦闘した相手モンスターに楔カウンターを乗せ、その楔カウンターを取り除けば、攻守を０にする神をも無力にする効果を持ちます」
淡々と語りだす、カードのＳＡＫＵＹＡが……
「そんな単調に終わらせはしません」
墓地のモンスターがアーマードウィングの前に立ちはだかり、攻撃を妨げる。
「……読んではいた。ネクロガードナーだな」
拳を受け止める亡霊と化した戦士が、無残に砕け散る。
「はい、ネクロガードナーは墓地から除外することで、バトルを一回、無効にすることが出来ます」
「……つまり、お前は俺を邪魔するわけだ」
ＡＬＦは、どこぞの悪役風味に微笑む。
「邪魔するわけですよ」
ＳＡＫＵＹＡは受け流すように微笑む。
「……カード咲夜の場にモンスターはいないよな。ザ・ワールド、

ゴヨウ……」

「不味ッ！　二人の通ったら攻撃力丸々削られる！」
黒猫、あおり役ご苦労様。
「いや、遊戯王知らん人々もいるしな」
「猫さん、何と喋ってるの？」

「いや、本当に不味いわよ？　ゴヨウと【世界】でダブルパンチ通ったら５９００。
上級モンスターのワンパンチで、ＳＡＫＵＹＡのＬｉｆｅは０。Ｔｈｅ　Ｅｎｄ」
「あ……後が無い」
ヴァルキュリアの解説に、真面目にぽかんとなる黒猫。

そして、二体の変態が動く。
歌舞伎がひも付き十手を振り回し、カードの精霊……ＳＡＫＵＹＡへと投げつけるが、ＳＡＫＵＹＡはそれを見切って避け切るのだが、ゴヨウ・カーディアンは、別の紐を握り締め、引っ張れば……縄に繋がっていたワールドをとんでもない力で引っ張り上げて、ＳＡＫＵＹＡに叩きつけようとして……
「ちょ！　それは流石に酷い！」
マスターのＡＬＦが静止した。が、ゴヨウ、急に言われても止まらない。
なんだかフォッフォッフォと変な泣き声を湛える通称【世界】がＳＡＫＵＹＡに降り注ぐが、ただデカイだけの機械天使。
時を止めて難なく移動して避けた刹那、
避けて停止した空間に違和感。

【世界】を縛り付けていた縄が、ＳＡＫＵＹＡに絡みつくッ！

「ゴヨウの効果発動！　【嫁分捕ったど～！】」

『Ｖｕｎｄｏｔｔａｄｏ～～！！』

「こらぁぁぁ！　プレイヤーをお持ち帰りしたら駄目ぇぇぇぇぇ！」

ジャッジ代わりのレミリアがガスガスとゴヨウガーディアンを殴り飛ばすが、どこ吹く風……

なお、ＳＡＫＵＹＡさんはＡＬＦの傍へ放り投げえられて、ＡＬＦ……キャッチ。

「よっしゃ！　姫抱っこミッションコンプ！」

「放してください。縊り殺しますよ？」

と、そのＡＬＦの背後に――

「いや、ゴヨウのダイレクトは通ったけど。ワールドがまだ殴ってないし」

ＳＡＫＵＹＡ　Ｌｉｆｅ　５２００

瞬間移動……同じく時を止めるモンスター、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄが

ＡＬＦのフィールドに舞い戻っており、

姫抱っこ状態のＳＡＫＵＹＡめがけて……腕ともつかない鋼鉄の爪

が、振り落とされ……

ると思ったら、ＳＡＫＵＹＡの銀髪にふれて、ぐりぐりと謎の動作

を残し終了。

ＳＡＫＵＹＡ　Ｌｉｆｅ　２１００

「……秘儀、【ある意味オーバーカタストロフ】」

「意味がわからないので綺麗に滑りました。滑ったついでに放して

ください」
「えぇ～？」
「人呼びますよ」
「人いっぱい居ますよ？」
「警察呼びますよ」
「いるの？」
「鴉天狗やそこの腋巫女とか」
「了解した」

しぶしぶキャッチ　アンド　リリース。

「……バスト８４。てゐのレジとどっちが正確だろう？」
「こらそこぉ！」
下のギャラリーからロリの罵声が飛んでくる。
「最低」「エロぃ」「何なんだアイツは」「セクハラデュエリスト」
「しかも男女関係なく掘る」
何だか一部、現実世界の住人が混ざっています。

「質問、８３って小さいのか？」
「お母さんに聞いてください」
ＳＡＫＵＹＡ……微笑が引きつっています。
「そうか、けっこうボリュームぬがはっ！？」

馬鹿を突っ込んだのは、意外にも下僕となっているはずのゴヨウ・ガーディアン。

「な、何をするって、鎧翼！？」

と鴉怪人まで拳をプルプル震わせ、けったいな顔の癖に血の涙まで流し始めている。

ゴヨウはついに下唇から血を……

そこで、ＡＬＦは気づく。

「しまった……そうだった、俺はなんて間違いを犯してしまったんだ」

ＯＴＬ

浮遊しながら挫折と言う奇妙な離れ業を見せる。

「お前ら、シンクロモンスターの面子にとって、咲夜さんのカードはいわば女神！」

コクコクコクッ！！

「植物魔人なヘルブランブルとか、機械なサイコヘルストランサーと違って、

咲夜さんのシンクロモンスターは、奇抜な形をしたお前らにとって、まさしく色気のある新たな女主人。

俺のデッキは最強カードを常に先頭に持っていく！　もちろん先頭は十六夜咲夜、彼女だ！

お前らにとって、あのカードの精霊、十六夜咲夜はお前らのアイドルにして女神にして唯一の癒し！　俺は、俺はシンクロモンスターの世界を穢そうとしていたのか！！」

がしぃぃぃぃ！！

ＢＦ　アーマードウィングがＡＬＦの肩を掴み、首を左右に振る。

ゴヨウも習い、ＡＬＦの肩を抱き、静かに男泣きを見せる。

「……許してくれるのか？　お前らの魂の象徴に手を掛けた俺を」
コクコクコク――チラッ
「……ありがとう、友よ。よく理解した。
……次のダイレクトアタックで自分が咲夜さんを（抱き）しとめる、とそう言いたいんだな」
パァ～～～（満悦の笑み
「お前ら、死ねば良いよ」
カードエクスクルーダーの冷徹な言葉に誰もが賛同したことだろう。
（読者的にも含めて

「見るがいい、これが男たちの結束！　友情の力を見せてやる！
ザ・ワールドの効果発動！！」
『『ッッッッッ！』』
ゴヨウとＢＦ二人は裏切られた驚愕でＡＬＦに連撃開始！！
効果発動条件、二体リリース。場には　ＢＦ鎧翼　ゴヨウ　世界。
うち、二体を墓地へ……
「ぶげらっ……じょ、冗談だよ。冗談……ターンエンド。次ぎ生き残った方が、咲夜さんげっちゅ……ぶげらっ」
「……我が創世者、猫守よ。何故にこんな主に……」
「ノリよ、ノリ」
本家咲夜、コロコロと楽しそうに笑ってましたとさ。
【９ターン目　ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　６５００
【手札　＋１枚】

【場□□□□□
□■■■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７（ＳＡＵＹＡ狙い）
【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６（ＳＡＫＵＹＡ狙い）
【アルカナフォースＸＸＩ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】　３１００／３１００　Ｌｖ８（攻撃表示・表側効果）（ＤＩＯ様目指す）

幻想郷で遊戯王４（前書き）

何ヶ月ぶりの更新かＯＴＬ　えっと、書き溜めたのを晒します　あとがきへ続くＯＴＬ

幻想郷で遊戯王４

「こんばんは、博麗霊夢です」
「霧雨魔理沙です」
「フランドールだよ！」

「三匹あわせて、スパーク巫女巫女ＵＮオーエンです」
「もうＭ－１ネタはもういいよ」
炬燵ヴァルキュリアに冷たい突っ込みをいれるカードエクスクルーダー。

【９ターン目　ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　６５００
【手札　＋１枚】
【場□□□□□
□■■■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７（ＳＡＵＹＡ狙い）
【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６（ＳＡＫＵＹＡ狙い）
【アルカナフォースＸＸＩ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】　３１００／３１００　Ｌｖ８（攻撃表示・表側効果）（ＤＩＯ様目指す）

――エンド。

【１０ターン目　ＳＡＫＵＹＡ】　Ｌｉｆｅ　２１００
【手札　＋１枚】
【場□■■■□
□□□□□】

「では、引きます」
軽く引いてから、少し躊躇し――
「……争いを再び撒きそうね。モンスターをセットしてターンエンド」
足元に横並びの裏側カードが、カード咲夜を守るように立ちはだかり、ただそれだけで終了。

【ＳＡＫＵＹＡ】　Ｌｉｆｅ　２１００
【手札　１枚】
【場□■■■□
□□■□□】

【１１ターン目　十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　５０７５
【手札１＋１】
【場□□■□□
□□■□□】

【究極宝玉神　レインボードラゴン】　４０００／０　Ｌｖ　１０
魔法【宝玉獣　サファイヤペガサス】
「では――私の」『じゃお～～～～～！！』

咲夜の台詞を何かすごい絶叫が遮った――
と、空気を読まずまぁ一枚引く。
「……で、貴女は何をしているんです」
「ぷっ――」
咲夜とＡＬＦが見据える先には――
「こらぁぁぁ！　そこの小僧、これ以上咲夜さんを辱めるな！」
「……まぁ、姉さんの年齢なら俺りゃ小僧だよな。でも、生足艶かしいからソコ立つな！！」
レインボードラゴン、高らかにいななき、頭上に乗っている乙女を際立たせる。
紅　美鈴。べにみすず　と書くのはよし、読みはホン・メイリンである。
「出たよ、足フェチ」「さすがはバレリーナの息子、足にはうるさいわね」
「猫、炬燵、黙れ――」
「こらぁ！　無視するな！　……さぁ、虹龍！」
『合点姐さぁ！』
彩符【極彩颱風】――
「って、スペカ！？　こら、こっちデュエル中！！」
「……ふぅん――」
何を思ったか、咲夜は頷いてから「バトルフェイズ」を宣言し――

「美鈴ｏｎレインボードラゴン……【Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ】に攻撃します」
虹を纏った美鈴に指示し……
無数の宝玉を空に散りばめる虹龍――と、全身の宝玉を弾き飛ばし、美鈴に集まると――虹色の輝きが美鈴を包み上げ、飛翔――
「……これ、なんてドラゴン球？」
後は、フルボッコ。
攻撃態勢に入った巨大天使を、一瞬で懐に入ったかと思うと……眼に見えない連続攻撃とか始めてみた。
あ、全身がズタズタ……さっきの小鴉とはケタ違いにみるみる劣化して、中身が露出していく。意外にも中身空洞だった。
見慣れていけば、蹴りや正拳といった連続攻撃なのがようやく見て取れるが……
「って、こら！　なんで美鈴参加してんねん！」
『参加じゃねぇ！　俺がサポートしてもらってんだ！』
と、なんかどこかの間違ったど根性の使い方をしたカエルのごとく、チャイナ服の中央に金色の瞳を輝かすレインボードラゴンが、雄たけびをあげると――
「じゃおぉ～～～！」
もう掛け声が脳内で定評したようで、同時に両手からか●はめ波をぶっぱなち……
でかすぎた。

両手から放たれた光弾は、美鈴の全身どころか、Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄの二倍は軽く上回り、さらに飛距離が増すにつれ、拡大していき……

妖怪の山を貫く……

あ、山壊れる程度の破壊力……と、一瞬誰もが思ったが。山と空の境界に、巨大なスキマが発生し、その光を飲み込んで、何事もなく終了。

放った美鈴本人も……呆然自失、当たり前だがＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄは塵も芥も残さず消失。

と、屋上にいきなり罪袋登場！

「すいません、海馬コーポレーション兼ボーダー商会の者です」

「何よ」

対応に出たのは意外にもレミリア。

「いえ、先ほどの巨大な砲撃ですが、少々お控えを……今回は紫様が気まぐれでお助けいただけましたが」

「あいつ、冬眠中じゃないの？」

「ええ、炬燵とミカンを武装して、お屋敷でＴＶでこの光景を見ておりまして……で、苦情に私が参りました」

……罪袋、乙。

「待て！　その前に聞こう！　その役目は藍しゃまがやるはずではないか！　油揚げ大好き、幻想郷第一位の巨乳持ち！　尻尾が男女

問わず大人気、我らが藍しゃま！」
「くぅぅぅ！　藍さまは現在強制帰宅されまして、紫さまの専属まくらをやっております！」
「な、なんて甘美な光景！　おぃ、今のうちに写真に抑えておけ！　あとで俺に回せ！」
「駄目です！　職務中なんですよ！」
「こっそり写メとれ写メ！」「幻想郷で携帯は使えません！」「使えなくても記録はできんだろう！　それに男には職務だろうが仕事だろうが、貫かねばならないフゲラッ――」
綺麗な回し蹴りがＡＬＦの横面に叩きつけられ－９００。（残機５６００。

「……まったく、野蛮な」
「ど、どっちが……」
「み、見えた……」
そこの罪袋、待て何が見えたッ！？
「スパッツなんて邪道です　ＯＴＬ」
と、ソノ罪袋に虹龍が服からブレスを吐いて、罪袋消滅。
「って！　こら、殺人すなぁぁぁぁぁ！」
「ご都合設定でどうでスキマ送りされてるでしょう……しっかし、この龍の加護、すんごいですねぇ」
「……まぁ、神クラスらしいからね、攻撃力４０００」
美鈴の衣装はいつもの緑チャイナから、白チャイナになって、中央にレインボードラゴンが悠然と浮遊している。
こら「で、何で胸元に頭乗せてやがんだ、変態虹龍……ッ！？」

刹那！　稲妻と共に新たな隙間が生まれ――中から巨大な……

「こ、このオーラはッッッ！」とカードＳＡＫＵＹＡが戦慄し、

「この気配、この波動、この俺と互角の熱気……」ＡＬＦが懐かしい気配に感動を覚えるッッッ

現れた　Ｔｈｅ　ＳＵ　ＫＩ　ＭＡ……

スキマから伸びる青年の腕が、何かを伝えようと空を掻き、現れた体から「美鈴は俺のよｍ」

「はい、自重～～～」別の罪袋登場。

スキマを閉じて、現れかけた誰かを強制転送。

「あ、あんまり美鈴さんで遊んだら猫守（ＡＬＦの友人）が強制登場してＥＸバトル始まりそうだから、気をつけなさいね？」

罪袋、言ったらいったで強制転移。

～～～～～～

「場面転換する時って、多分場の空気がグデグデになったときだと思うのよね」

それを言わないで、霊夢……

「まぁ、出番増えますし」

ちょ、そこ東風谷さん、お酒飲まない。

魔理沙は飽きたのか炬燵で寝始めている。

何このマリ才とノレイーヅ……

「ただ紅いのと翠いだけじゃない……グビグビ」
こら、だから酒飲むな紅白……

「キャッハッハッハ」
原因の鬼、伊吹翠香。腋鬼。

〜〜〜〜〜〜

【11ターン目　ALF】　Life　5600
【手札　1＋1枚】
【場□□□□□
□■□■□】

【BF―アーマード・ウィング】　2500／1500　Lv7（SAUYA狙い）
【ゴヨウ・ガーディアン】　2800／2000　Lv6（SAKUYA狙い）

「……ドロー」
カードを引くと同時に場を確認。

【SAKUYA】　Life　2100
【手札　1枚】
【場□■■■□
□□■□□】

【十六夜　咲夜】　Life　5075
【手札2】

【場□□■□□
□□■□□】

（……咲夜さんは、補助系の罠か何か。
で、ウチのＳＡＫＵＹＡのは、おそらく使いそびれた【弾圧】と、魔法罠にカウンターする奴。
……さて、裏守備は――）

ＳＡＫＵＹＡの前に立ちふさがる、裏側表示で現れる巨大なカード……
漂う気配と、思い出す台詞――。
手札を確認。今、速攻魔法が一枚と、デッキの主役となるモンスターの一体。だが、今は召喚しても意味は無い。

「スタンバイ経由、メイン飛ばし、バトル！
再び美鈴Ｔｈｅ Ｒａｉｎｂｏｗに翼鎧！　続いて――ゴヨウはＳＡＫＵＹＡの裏守備モンスター！」

ＡＬＦ得意技、指を鳴らし。同時に左右から歌舞伎モンスター、鴉怪人が飛び出し、それぞれの獲物に襲い掛かる。

「させない！」「迎え撃ちなさい！　今のあなたは門番の癖に、攻撃力は４０００よ！」「さ、咲夜さぁん！」
ガビィ～～～ンって泣きながら、漆黒の怪人相手に、体術を繰り出すのだが――放たれた羽が美鈴の腹に突き刺さり、たったそれだけの一撃が、美鈴の四肢の力を奪い、その場に崩れ落ちる。

「美鈴ッ！」
戦慄する咲夜の横で、もう一人のＳＡＫＵＹＡの裏側のカードが開

かれる。

「……攻撃は、先に美鈴へ。だから、美鈴にまずは、【楔カウンター】が。」

冷静な声で、ＳＡＫＵＹＡは告げると、

「続いて、私の【メタモルポット】の効果を、起動！」

裏側に控えていた壺の中へ、三人の手札が飲み込まれる。

「俺は、【決闘獣　ラクエル】と【決闘獣の底力】」

「では、私は【不吉な黒猫】を」

「……【ルビーカーバンクル】と【神の住居　ヴァルハラ】」

ＡＬＦは舌打ちと共に、安堵を覚える。

「……鬼ヅモだなおい、咲夜さん――美鈴倒しても、次にはワールドでもアイツでも出し放題だったってワケかよ」

「ええ、ですがメタモルのもう一つの効果。手札をお互い――」

「ああ、５枚ドロー！」

お互いに手札が募ったこの状況――そして、ＡＬＦは凄惨な笑みを浮かべた後。

「モンスターをセットして、ターンエンド」

【１２ターン目　ＳＡＫＵＹＡ】　Ｌｉｆｅ　２１００
【手札　５＋１枚】
【場□■■■□
　□□□□□】

「では、引きます……」

ＡＬＦのカード精霊である、ＳＡＫＵＹＡだが、表情は一変もなく、

ただカードを凝視していたが、

【ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　５６００
【手札　４枚】
【場□□□□□
□■■■□】

【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７（ＳＡＵＹＡ狙い）
【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６（ＳＡＫＵＹＡ狙い）
【裏側守備表示】？？？／？？？

【十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　５０７５
【手札　５枚】
【場□□■□□
□□■□□】

【究極宝玉神　レインボードラゴン】　４０００／０　Ｌｖ１０
魔法【宝玉獣　サファイアペガサス】

「スタンバイ、そしてメインに移ります。……再び、【ネクロバレー】を発動（インヴォーク）」
紅魔館の周りが、森から一挙に、月夜の輝く巨大な谷へと変貌する。
だが、今宵の満月は、どことなく血の色を髣髴とさせる……

「手札から、【フレイムベル・マジカル】を召喚（サモン）……お二人に、反応（カウンター）はございますか？」
「無（ナッシング）」
「ございません」

英語にあわせる馬鹿は、もちろんＡＬＦで、瀟洒な咲夜は丁寧に……

「では、さらにカードを二枚セットいたしまして、わたくしは終了と相成ります」

【ＳＡＫＵＹＡ】　Ｌｉｆｅ　２１００
【手札　３枚】【Ｆ：ネクロバレー】
【場■■■■■
□□■□□】
【フレイムベル・マジカル】　１４００／２００　（チューナー）

「では、私の番です――」
ナイフを髪髢とさせる咲夜の爪に選ばれた――新たな手札。

【１３ターン目　十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　５０７５
【手札　５＋１枚】
【場□□■□□
□□■□□】
【究極宝玉神　レインボードラゴン】　４０００／０　Ｌｖ１０
【ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　５６００
【手札　５枚】
【場□□□□□
□■□■□】
【ＢＦ－アーマード・ウィング】　２５００／１５００　Ｌｖ７（ＳＡＵＹＡ狙い）

【ゴヨウ・ガーディアン】　２８００／２０００　Ｌｖ６（ＳＡＫＵＹＡ狙い）

「美鈴、大丈夫？」
「……へ、平気です。咲……じゃなくってＳＡＫＵＹＡさん」
「咲夜、あの黒い鴉、アレが美鈴を穿った羽を操る魔物よ。アレを倒すのは、美鈴じゃなく……貴女よ」
「……わかりました。ご忠告、ありがとう。私」
「どういたしまして、私」

二人のメイドのやり取りに、唇を噛み、何故か微笑を浮かべるＡＬＦ。
「そりゃ、手札五枚もありゃ……簡単に崩せるよな、この布陣」

「では、スタンバイ、メインフェイズ――私はこの魔法カードを発動し、バトルフェイズ！」
手札から放たれた、腕の絵柄のカード――同時に、美鈴Ｉｎレインボードラゴンが強襲を仕掛ける……
と、同時に咲夜が飛び出して、ナイフが煌めく。

戦闘破壊不能、カラスの怪人に襲い掛かる！

突然の事体にアーマード・ウィングは拳を振り上げたが――咲夜のナイフは、

鎧翼の足元を穿っていた。
空間を――切り裂いてる？

「へぇ、私、次元を切り裂けるようになったのかしら？」
咲夜の背後で翻る……【地割れ】の魔法カード！

相手フィールド上、もっとも攻撃力の低いカード、すなわち２５００のアーマードウィングを、破壊するカード！

切り裂かれた次元の向こうへ、落下して粉々に砕け散った鎧翼。
同時に、ゴヨウガーディアンに強襲していた美鈴の波動が、ゴヨウの胸板を貫き――爆散。

「私を襲いたかったのでしょう？　お二方。
従者として従順なご褒美に、私本家が直々に屠って差し上げました。
お礼のほうは結構ですので」

スカートの裾をつまんで一礼して、ＡＬＦに見せ付ける。
今、ＡＬＦの場は……がら空きで――

「戦闘ダメージの余波は、受けてもらうわよ！」
美鈴の追撃の踵落しが、ＡＬＦの脳天を襲……

防いだ肘が、美鈴の足を阻むが――素人技、ＡＬＦはその一撃で崩れ落ちかけるが、両足で踏ん張り――血反吐を吐く。
「……嗚呼、なんて厨二病患者なんだ俺。こんな馬鹿騒ぎが、こんなに楽しいなんて」
残機５６００－１２００（戦闘ダメージ差）。

【１３ターン目　十六夜　咲夜】　Ｌｉｆｅ　５０７５
【手札　５枚】
【場□□■□□
□□■□□】

【１４ターン目　ＡＬＦ】　Ｌｉｆｅ　４４００
【手札　５＋１枚】
【場□□□□□
□□■□□】

「ずっと、考えてた。なんで俺が幻想郷なんかに来てしまったか？
なんてよ」
「……」
「考えなくても、答えはわかりきっていたじゃん。ここは、忘れ去られた怪異が集う最後の楽園。違う――
ここは忘れ去られた、【強力】で【凶悪】な、現世に疎まれた【力】がはびこる世界！
こんな場所に、ちっぽけで単なる一般馬鹿、厨二全開の自分が、何で迷い込まなきゃならないんだって。
いや、誰もがこの世界を望むだろう、願うだろう。
詰まらない日常からの脱却、未知の世界、現世の人間は望み願い、そして集まる！
……だけどだけどだけど、ここでだって俺は変われなかった。
日々霊夢の下でだらだら過ごし、ネットもゲームも仕事も変化も無く、ただ力在るものだけが好き勝手暴れて、それを巫女が諌める日々――
一緒に迷い込んだカードと、そのカードの力だけが、変わった……
ただそれだけだ。でも――」

ＡＬＦのターン……

「そんなもの、必要なかった。俺は、何も考えず、何も思わず、何もかも忘れて、楽しく暴れ始めれば良かったんだ。
ここに、現世のしがらみはもう何も無い。
十六夜　咲夜……アンタに惚れたこと、誇りに思う！」

「いや、勝手に美化されてもねぇ？」
心底嫌そうに答える咲夜さん。

「陳腐でチープでありきたりで、正直それって俺の嫌いな単語なんだけど、嗚呼、言わせてもらうぜ。
本気で行く！」
「では、」「返り討ちにさせていただきます」

「Ｉｔ，ｓ　Ｍｙ　Ｔｕｒｎ！　Ｄｒｏｗ――」

幻想郷で遊戯王４（後書き）

結論　とりあえず、長いのとグデグデ感が漂うので、この話さっさと切りますＯＴＬ

はい――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0180g/

遊戯王＋俺が幻想入

2010年10月9日02時58分発行